

# IT 弱者といたしましては 評論家 矢野誠一

日本経済新聞・夕刊(2022年1月15日)より

携帯電話は言わずもがな、スマートフォンも持たずに、野田秀樹流に言う「コロナ禍下」の時代に向きあっている。

ファクシミリ兼用の固定電話に頼り、6年前に他界した荆妻(けいさい)が時どきいじくっていたパソコンのカヴァーは薄埃(ほこり)をかぶっている。それでも新聞とラジオとテレビだけで、世界の大方の様子は知ることができるし、日本国憲法第25条で保障されている「健康で文化的な最低限度の生活を営む」ことに、さしたる痛痒(つうよう)を感じたこともなかった。

コロナのおかげで、2020年3月25日国際フォーラムの『サンセット大通り』から、7月7日紀伊国屋サザンシアターで『人間合格』を観(み)るまでの103日間、私の日常となっていた劇場通いが叶(かな)わず、半分蟄居(ちつきよ)の状態を強いられた。この頃から、わが健康で文化的な最低限度の暮らしを危うくさせる、理解不能の言語や方法が無断侵入し始めた。

オンライン、ユーチューブ、SNS、ウェブ、ネット配信、エトセトラエトセトラ……。単純な言葉の前に「#」なるマークだかロゴだか意味をはかりかねる記号のつくのも気になるが、バーコードの記された「払込取扱票」でコンビニエンスストアから送金しながら、そのメカニズムがよく分かっていない身に、なんだか指紋の化物めいた四角いマークがそこら中にあるのも目ざわりだ。もっともこれはスマートフォンのない者には無用の長物らしく、無視していればすむことだ。

そんなことより気がついてみれば、劇場で顔をあわせる同業者のほとんどが、スマートフォンを持参しているばかりか、原稿を書くのも、送稿するのにもIT器機を使用しているのには、正直少しばかりたじろいでいる。

なんとしても筆一本で喰(く)っていこうという意気込み盛んだった若い時分、書いた原稿は出前よろしく届けていた。年上の担当編集者が目の前で読んで、述べてくれる感想がずいぶんと勉強になったし、珈琲(コーヒー)などご馳走(ちそう)になりながらの雑談から、新しい仕事のアイデアを与えられたことも少なくなかった。それよりなにより、原稿料や印税の前借で辛くもしのいでいた時代、出版社訪問は欠かせない行事だったのだ。

いまでは原稿の受け渡しを、直接編集者とすることはほとんどない。もっぱら郵送しているが、締切りぎりぎりのときなどはファクシミリを利用して、送信済の原稿をあらためて郵送するのだ。面倒で無駄だと言われそうだが、しがたい物書き渡世にとって書いた原稿は商品なのだ。商品は完全なカタチで納品するのが建前と考える。未知の編集者から電話で原稿依頼されることがある。引き受ける

とあらためて依頼書のようなものが、ファクシミリで送られてくる。原稿を送って、掲載誌が送られて、原稿料が振込まれる。この間一度もその編集者の顔を見ていないので、おもてですれ違っても気づかないはずだ。編集者が女性だと、なんとなく気にかかるのだけだ。

原稿はペリカンの万年筆で書く。西ドイツ時代の現地で買ったもの、丸善で求めたもの、ひと様から頂戴したものなどあわせて10本ほど手もとにある。そのときの気分で選ぶのだが、インクの切れぐあいなどもあって、一本の原稿に数本使うこともある。そのインクはモンブランの黒。手書きの原稿は物書きでももはや少数派だと言われる。少数派はもとより望むところだが、手書原稿をIT器機用に変換する作業に編集者の手を煩わしているときいて、いささか申し訳ない気分がしている。申し訳ないが、人に迷惑をかけながら重ねてきた馬齢、このままつづけていくほかにさしてよい途があるわけじゃないと、開きなおるよりいたし方ない。

書くのも、その書いた原稿を送るのも、器械まかせが当り前の流れに逆らっている私には、郵便受けに投げ込まれている「老人向スマホ教室」の勧誘チラシにからかわれている気がしないでもない。いくら年齢のちがわない友人に「最初は苦勞するけど、馴(な)ればなんでもないよ」などと言われても、心動かすことはない。

どんなに人に迷惑をかけつづけても、いまさらスマートフォンを手にしようなどという気持がこれっぽっちもないのは、それでなくても残り少ない余生の貴重な時間を、そんなことに費すより、一枚でも多く原稿を書くことに使いたいからです。

やの・せいいち 評論家。1935年東京生まれ。96年「戸板康二の歳月」で大衆文学研究賞。著書に「舞台の記憶」「ぜんぶ落語の話」など。